

	訪問都市	時刻	日程内容・宿泊地・食事
1	東京 西安	19:55 18:20 昼	<p>□成田空港へ出発2時間前に集合</p> <p>■午前、中国東方航空にて、北京経由、西安へ。 (西安泊) □田舎</p>
2	西安 敦煌 (陽關) (玉門関) (西千仏洞)	朝 + 午前	<p>■朝、空路、芸術の宝庫・敦煌へ向かいます。</p> <p>■終日、党河の断崖に築かれた西千仏洞、西域南道への関門だった陽關と陽關博物館、天山北路へ通じる玉門関、敦煌博物館を見学します。</p> <p><b>★夜、明門関による敦煌の特別観光</b></p> <p><b>★夕食には特別ならくど料理「雪山駝掌」をどうぞ。</b> (敦煌泊) □田舎</p>
3	敦煌滞在 (莫高窟)		<p>■終日、砂漠の大壁画莫高窟を訪ねます。今世紀初頭に経文が発見された16窟、17窟、盛唐期最大の「弥勒經堂相図」が残る148窟、南天仏窟と言われる盛唐時代の130窟、飛天舞う428窟、盛唐時代の供養菩薩像のある328窟をじっくりとご案内します。</p> <p>■一般には公開されていない、盛唐壁画の最高傑作並ぶ45窟、壁画と壁画が一体となって涅槃経を構成する158窟、壁画の白画「樹下說法図」菩薩像あがる57窟を見学します。</p> <p><b>★夕刻、鳴沙山と月牙泉へ。砂漠をラクダに乗り散策します。</b> (敦煌泊) □田舎</p>
4	敦煌 (榆林窟) 安西	08:00 — 18:00	<p>■朝食後、河西回廊の主要オアシスの1つ、安西へ。</p> <p>■その後、榆林窟を挟む断崖に残る榆林窟にご案内します。唐代の飛天の壁画のある15窟、「八大菩薩曼陀羅經堂」が描かれている第25窟、水月観音が描かれた第2窟、現存する最古の三蔵法師の物語といわれる「玄奘取経図」が残る第3窟、白度母の壁画がある第4窟を訪ねます。 (安西泊) □田舎</p>
5	安西 (高峪関) (懸置壁画墓) 酒泉	08:00 — 18:00	<p>■朝食後、シルクロード特有の寛々しい美しさを秘めた河西回廊の旅のはじまりです。</p> <p>■まず、河西四郡(現在の敦煌・酒泉・張掖・武威)のひとつ、酒泉に向かいます。</p> <p>■途中、万里の長城の最西端にある高峪関、酒泉郊外のゴビ遺下に眠る懸置壁画墓に立ち寄りませう。 (酒泉又は高峪関泊) □田舎</p>
6	酒泉 (黑水国城壁遗址) 張掖	10:00 — 18:00	<p>■朝食後、酒泉市内観光。いまでも清らかな水をたたえる酒泉公園、鐘鼓楼にご案内します。</p> <p>■その後、河西回廊をさらに走り、「金の張掖、銀の武威」と呼ばれた、張掖に向かいます。</p> <p>■途中、現在は流沙に埋もれるかつてのシルクロードの駅町・黑水国城壁遗址に立ち寄りませう。</p> <p>■その後、張掖市内観光。マルコ・ポーロの『東方見聞録』の記述にもある大仏寺にご案内します。 (張掖泊) □田舎</p>
7	張掖 武威	08:00 — 19:00	<p>■朝食後、祁連山脈や万里の長城を眺めながら、再び河西回廊を走り武威へ向かいます。</p> <p><b>★途中、裕固族の民家訪問にご案内します。</b> (武威泊) □田舎</p>
7	張掖 武威	08:00 — 19:00	<p>■朝食後、祁連山脈や万里の長城を眺めながら、再び河西回廊を走り武威へ向かいます。</p> <p><b>★途中、裕固族の民家訪問にご案内します。</b> (武威泊) □田舎</p>
8	武威 (烏鞘嶺) 蘭州	10:30 — 18:00	<p>■朝食後、古くは涼州と呼ばれた緑豊かな武威市内観光。飛燕を説く青銅の奔馬が出土した雷台、幻の西夏文字を伝える「西夏碑」の残る文廟など。</p> <p>■午後、烏鞘嶺(3000m)を越え、黄河本流における最大の町蘭州へ。</p> <p><b>★夜、蘭州名物の牛肉麺をお召し上がり下さい。</b> (蘭州泊) □田舎</p>
9	蘭州 炳靈寺石窟 蘭州 西安	昼 + 夜	<p>■終日、炳靈寺石窟観光へご案内します。</p> <p>■刘家峡ダムより黄河をさかのぼると、怪奇な群峰が続き、石窟の穿たれた断崖が迫ってきます。</p> <p>■中国とインドの様式をあわせもつ西域風の造像や龕仏、壁画などをご覧頂きます。なかでも、27mの高さから黄河を見おろす大摩崖仏(171尊)は圧巻です。[注]刘家峡ダムの水位が下がり、炳靈寺の観光ができない場合は、蘭州の市内観光を行います。</p> <p>■夜、空路、古都、西安へ。 (西安泊) □田舎</p>
10	西安 東京	12:10 + 19:00	<p>■朝食後、西安市内観光。城内の中心に立つ鐘樓、シルクロードの起点・西門にご案内します。</p> <p>■昼、空路、北京経由、帰国の途へ。</p> <p>■夜、成田空港到着。通関後、解散。 □田舎</p>



シルクロードは西安を起点としてローマへ至る古代の東西交易路である。今回は第一回目として中国甘粛省内の旅を選んだ。河西回廊と言われている。敦煌を起点としてバスで東へ遊行し蘭州へ至る旅程である。蘭州から西安までは航空機利用である。

今回の旅行は当初阪急トラピックスで企画したパックツアーが6月2日から10日間の予定で募集されたので旅と囲碁の畏友橋田さんと共に参加申し込みをしていたのだが、募集人員が集まらず、催行が中止になった。そこでインターネットで検索すると全く同様の企画がユーラシア旅行社であることを知り、申し込み実現したのである。この旅の企画については当初の6月20日からの予定だと6月23日に大学の寮友仲間内で毎月実施しているゴルフの会と競合するので代打の友人を探し出してセットしたという経緯もあり、是非行ってみたいコースであったため催行も決定し、今現実に旅が始まろうとしているだけに感慨も一入深いものがある。結果的にはユーラシア旅行社の企画には満足するものがあつた。

満足できた点は阪急トラピックスや近畿日本ツーリストの企画と比較して以下の点で違いが際立っていたからである。

土産物店への立ち寄りが皆無であったこと。

人数が17人であったが大型バスで移動したため座席に全員一人がけできたこと。

毎日の行動が克明に時間、場所、立ち寄り場所等ともに記録され、そのコピーが配布されたこと。これは帰国後の写真の整理や紀行記の作成に非常に役にたった。

旅行代金も上記二社に比べて高からず安からずでリーズナブルであったこと。

イヤフォンガイドを参加者全員に貸与し、ガイドの声が明瞭に聞こえる配慮のあつたこと。

9時20分に添乗員の大町章子嬢を中心に同行者の顔合わせをした。男12人、女5人で計17人の手頃なパーティーである。夫婦は一組だけで皆百戦錬磨の旅の強者ばかりという印象である。

今回は酒類の機内持ち込みは禁止されているというので予め求めておいたウイスキーはスーツケースの中に忍ばせておいたから免税店では何も買うものがない。

成田を11時18分発の中国東方航空MU508便で出発。時差は1時間遅れで14時40分に北京首都国際空港へ到着。所要時間約3時間半。北京で入国手続きを済ますため一旦機外へでるが係員がなかなか来ないで暫くまたされた。

北京から西安までは国内線になるためアルコール類の機内持ち込みが禁止されるという理屈である。これは中国の酒は度数が強く、火がつくので危険物とみるらしい。それも中国人がかつて酒に火をつけて機内で騒ぐという事件があつたため規制が厳しくなり、酒類の機内持ち込みができなくなったというのが真相らしい。この種の規則とか規制はなにか事件が発生すると必ず再発防止ということで厳しくなるものである。不心得なものがあると自由が制限されるという好例である。

機内で中華の昼食を摂ったがウイスキーやブランデーのサービスはなかった。ビールで我慢する。青島ビールであった。

14時50分北京を出発し16時22分に西安咸陽国際空港へ到着。前回訪問した時よりも建物が変わっていた。新しい建物が旧施設に並んで増設されたい。

現地ガイドは王正安氏で日本語はそこそこの実力で人柄は悪くない。



西安空港の新しい建物



西安市内近くの道路工事



道路の片側を囲っていた。工事現場に出入りの車

西安市内まで約1時間ほどのドライブで窓外に見えている田園風景の中に点在する小高い山は古代の王侯や貴族の墳墓であろう。

西安市内近くの道路では片側の通路を囲って道路工事が行われていた。そして工事現場へ出入りする下請け業者や納品業者の原動機つきリヤカーも散見した。

西安市内には新しいビルが沢山建っていた。中国の経済発展も沿海部から漸く内陸部へ及び西安市内も目下大規模に普請中との第一印象である。



西安市内の建築中のホテル



西安市内の新しいビル



西安市近郊の地上げ現場

最初に鼓楼へ見学に行った。鼓楼は城郭の中心にあって昔は、時を告げた重要な建物であるが、生憎修理中で中は入れなかった。日本から派遣された遣唐使達も当時長安と言われた都のこの鼓楼の前に立ち、物思いに耽ったことであろう。

ホテルは西安賓館で旧市内の南門の近くである。

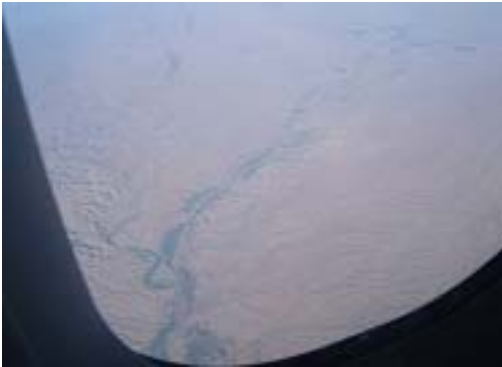


鐘鼓楼 生憎逆光で鮮明な画像が撮れなかった。

鐘鼓楼近くの餃子で有名な店

平成16年7月3日(土)

西安から飛行機で敦煌へ飛んだ。機中から地上を俯瞰すると砂漠の中に帯状に緑が広がっている箇所が幾つか見える。これがオアシスでそこには河西回廊の都市が営まれているのである。敦煌近くになると緑の巾と長さがとても大きなものになり、敦煌が西域の重要な拠点都市であることがよく判る。



俯瞰した砂漠の中のオアシス



手前のオアシスの向こうに沙漠を挟んで崑崙山脈の雪山が見える



敦煌上空から見た俯瞰図

敦煌とは盛大に繁栄する街という意味だという。この辺境の地の地名「敦煌」が史書に表れるのは漢の武帝(BC141~87)の時代である。この頃この地域の支配者であった月氏が追い払われて、匈奴がこの地帯を支配していた。これに対抗して西域の不安を取り除くために武帝は匈奴討伐に乗り出したのである。武帝の命を受けた衛青(えいせい、?~BC106)、霍去病(かくきょへい、?~BC117)等といった将軍の活躍により武帝軍は匈奴を追い払ってしまった。爾来敦煌は河西回廊西端の重要な拠点として歴史に登場することになる。武帝は万里の長城を敦煌まで伸ばし匈奴に対する備えを万全

のものにしたのである。かくして、敦煌はシルクロード（絹の道）の西の出口、東の入り口として盛大に繁栄する街の異名をとることになったのである。

以下の記述は村上みどり氏のサイト【シルクロード・河西回廊、敦煌に行く】から引用させて頂いた。

引用開始

シルクロードの冒険商人達は早くも1世紀頃に敦煌に姿を現している。中央アジアのサマルカンド、ブハラなどの商人が、東西を結ぶ役目を担っていた。敦煌の名前がプトレマイオスの「地理書」に登場するのもこの商人達のお陰である。

もうひとつ、敦煌が歴史において重要な役割を果たすのは仏教の伝来路としてである。紀元前2世紀頃、匈奴に追われた月氏は、その後、アフガニスタンで大月氏帝国を築きあげた。この月氏の手を経て中国に最初に仏教がもたらされたという。

時代はちょうど、紀元の変わり目の頃である。更に2世紀になって、仏教の伝来は本格化する。インドの経典が続々ともたらされ始める。僧達は敦煌で漢語を学び、布教のために長安に赴いた。「敦煌菩薩」として知られる竺法護（じくほうご）、鳩摩羅什（くまらじゅう）といった名前が、インド経典の中国語訳の功労者として、敦煌の名と結びついている。

敦煌が最盛期を迎えたのが隋、唐時代である。シルクロードの交易と、仏教への帰依が敦煌の重要性を高めた。敦煌は砂漠の街であるから砂嵐は通常のことと朝夕の寒暖の差が激しく、「朝は綿入れ、昼はシルク、夜はこたつに入ってスイカを食べる」といわれている。セキセキ草、ラクダ草、タマリスクがゴビの三宝になっている。

莫高窟が盛んになるのもこの時期である。755年に起こった安・史の乱の影響で中央政府の影響が弱くなった。それに呼応して西域では吐蕃国の力が強まり、781年に敦煌はその支配下に置かれる。その後、唐の武宗が845年に廃仏を行い、中央の仏教寺院はことごとく破壊されたが敦煌は吐蕃の支配下にあったので難を逃れた。

唐から宋に王朝が変わるに及んで、敦煌は中央から切り離され、西夏王国の支配下に入る。この時、西夏襲来に備えて仏典多数が洞窟に塗り込められた。これが有名な敦煌文書で20世紀の初頭に発見された。マルコポーロが敦煌を通過するときには敦煌をサチューとして「東方見聞録」に紹介している。「多くの寺院・僧院があって、そこにはありとあらゆる偶像が所狭しと安置されている」との記述がある。引用終わり

空港から敦煌市内を經由して西千仏洞へ直行した。西千仏洞は党河の断崖の上にある石窟で莫高窟の西側にある。窟は19箇所現存するがそのうち六ヶ所の窟を見学した。3窟と4窟には何れも唐時代に彫られた3人の菩薩があった。5窟には北魏時代の千仏観音像が彫られており、窟の中心には柱が設けられているが像は水で壊れていた。

6窟は北周時代のもの。7窟は西魏時代に設けられ過去仏、現在仏、未来仏、西夏の涅槃仏が安置されている。9窟は北周時代の千仏観音像。

どの窟も内部の撮影が禁止されているので像を示すことができない。

大地を切り裂いたような裂け目の断崖に窟は穿たれていてよくも根気よく仏像を彫り続けたものだという印象が強い。断崖の前の広場には樹齢の大きなポプラの木が生い茂っていた。



西千仏洞の窟の穿たれている断崖



西千仏洞のある溪谷に生い茂るポプラ  
手前の砂岩の下方の断崖に窟がある。